森の名手・名人シリーズ37

名人 和田 光雄（74）
岐阜県郡上市

聞き手 森 恒樹
岐阜県立郡上高等学校三年
平成22年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、45名の「森の名手・名人」がいます。この「森の名手・名人」を「森の聞き書き甲子園」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

造林手（枝打ち）
杉を愛し続けた60年

1. 林業という仕事

僕の仕事は山全部ですわ。苗木造りから植林、そして草が伸びてこれば、それを刈ってやる下刈り、木を切る伐採、山に必要なことは、全部やっております。自分の山で木を植えて経営しとる。約45から50haほどを一人で。

僕んとこは、主に杉を植えとります。杉を植えて、ひとねるまでの流れとしては、植えて5、6年は、下刈りと雪で倒れてしまったものを起こす雪起こし。そして6、7年頃から枝打ちをやります。枝打ちの一番最初は、すそ払いという作業をやります。下から枝が出とるでしょ。それをだいたい1mくらい払ってやると、雪で倒れんようになる。下まで枝が出とると、雪が溜まって雪倒れの原因になるから。そんで12年くらいから5、6年ごとに、本格的に枝打ちを順番にやってくんですね。間伐は20年から25年くらいからやります。間伐は、杉が正常にひとなっていくように、ええ木を残して悪い木を切ってやるんです。そうせんと1本1本がいかいにならん。風で災害を受けたり雪害を受けたりしんようにしてやるんです。そして育てた杉を市場に出す。それが最後の収穫ですね。ええ材を採るってと、90年以上は経たんと本当の杉にはならんのです。

2. 父親が師匠

父親が林業をやっとって始めたもんで、学校の休みとかは、山に手伝いで父親についていって習ってきたんです。それが12歳からです。林業の基本をそこで見て覚えてきたんですね。父親も山が好きで、山仕事を随分やってました。あんな長い時間のかかる仕事したってだしかんって、笑われるようなことやっとるんじゃって喜んどったです。それが、やはり戦後の木が足らんときにぶつかって、景気が良かったていうか、成功してきたような訳です。それが始まりです。

今住んどる家の木は父親が植えた木です。家自体は僕が作ったんですけんど。明治21年生まれの父親が26歳の時、植えた木で、僕も手入れしたし、記念に家に使ったんですわ。

3. 力を入れていること

一番力を入れていることは、枝打ちと優良品種の挿し木の苗木作りやね。

〈枝うち〉

枝打ちの一番の原点は、ええ材を作る、節の少ない材を作るってことなんですね。早く技を落としとけば、節のない丈夫いものがひとなるということ。木は子供と一緒で、小さいうちから手入れをして育ててこそ、ええ木ができるんですわ。

枝打ちはカーツカッターで全部やるんですわ。僕がカーツカッターを使いだいてから一人前になるのは、10年かかったです。枝打ちの一番最初は鋸で、次、鉈で、次に昭和50～55年くらいから普及し始めたのが、カーツカッターです。木によって違うんですけんど、普通、20年から25年経った木を60本から100本くらい枝を落とします。枝打ちせる時は、8m、10mも登って枝を打ったこともあるんですけど、そんでも命綱をつけてやりゃ危険は昔みたいにはないと思う。

樹幹をなるべく傷をつけんように、枝の分で止めな駄目なんです。そうせんと、健康でない木にしてまうんですね。そうすると害虫が入るんです。上手に打てば、腐りが入らん。腐りが入ると売ることはできるけんど、そうなると価値が下がるんですね。それは、製品にしてみんと分からんです。

〈苗木作り〉

優良品種の挿し木の苗木作りは、杉で父親が昭和20年以上前から始めとるんです。挿し木は、山で枝を取ってきて、2年土に埋めて苗にしてまた山に行き植えるやり方。杉の枝を切って育てれば、そのまま同じ杉が山にできていくという方法をとっとるんです。挿し木は、100年経った木から採った枝でも、2年すればそれに根がついて、おんなじ木がひとなるってことです。元が一緒ですから。ええ杉から枝をとってきたやつが、優良挿し木ですわ。杉でも品種があるんです。僕の山では、30種類くらいはやっとるでしょうね。杉はどんなやつでも、枝をとってきて挿せば育つけんど、120年でも300年でも生きれる木と、そんに生きれん木とあるんです。それを自分の目で見て、採ってきて、挿すんですね。長く生きて素性のええ木。その時代その時代で優良なやつを探いてにゃー作ってきとるんです。ええ木を探いて挿し枝をとってくることが一番原則やもんで。ええものを植えてこそ、ええ木ができるんですわ。

ええ苗木を植えときゃ、120年経っても500年経っても、ええものがひとなってくでしょ。その代わり一番欠点は、手入れを怠るとダメになるってことですね。世代に渡って手入れしてかんと駄目なんです。挿し木は、おんなじ品種でみな一緒にひとなるから、間伐してやって、あんばようしてやらんと、一人前のものはできんのです。僕は、それがどんな品種の杉やって葉と杉の皮を見れば、一目で見分けるんですわぁ。それと一緒で杉がどんだけ大事なもんかってことを知っとるんです。

枝打ちをする名人

枝打ちの際利用するカーツカッター

4. 先祖が残してくれた木

僕は先祖が植えた木を切って生活してきとるもんで、植えることも切ることもせんならんのです。それが生活してく基準なんですよ。そして、前の世代の人らが植えた木をもらってやってきとるもんで、今度は次の世代の分を植えていく。植える人がないと、100年の杉の木もできんのですわ。

林業は結局、年月がかかるってことが、長所でもあり短所でもある。でもそんだけ経たんことには、利益にならんのです。絶対にそんだけの期間がないとええ木ができんのです。それが強みですわね。それを行うってことは、人が木を大事にして自然を愛する。一番大事なことなんです。それこそが、みんなが言ってみえる環境とか資源の元になっていくもんで、それが一番大事やと思う。そして、70歳も越えてから、木を植える馬鹿がおるって思われたって、僕は馬鹿でないと思う。これが僕の仕事ですから。農業は1年で回っていくから、結果が分かるんですけんど、林業は結果が分からんのですわね。3代、4代後になる。その元をつくっていくのが、我々の仕事やと思っているんですけんど。ほれには、確実な木を育ててかんと。

5. 林業への思い

木が正常にひとなっていくことを見るのが一番楽しみですわね。僕んたぁは山に行って、木を眺めて楽しんどるようなもんです。自然のものは、手をかけてくれるほどよくなるということが楽しみですねぇ。やっぱり自然と付き合っていけるってことが一番喜びでやっとるんです。

僕が、誇りに思っとるのは、僕の方が絶対いい木をつくるんだということ、杉のことに対しては僕はプロじゃと思っとるんです。ヒノキはまだ今研究中なんじゃけんど、杉のことについては、品種とか何かにつけたってプロであるということは、自信持っております。

6. 後継者

孫は、まんだ全然関心がないねぇ。やるかやらんか僕んたぁも分からん。僕はやってほしいと思っとるけんど。僕は一代分を、僕の範囲だけをやってけば、あとはやってくれんでも、仕方がないと思っとる。そんなこと子供に押しつけれんから。ええと思や真似するじゃと思うで、やっぱり生活が安定してできるような基礎をつくることが、僕としては、一番大事やと思っとるんです。林業の魅力つてものをつくってかんと。弟子とかは、まぁみんな見て覚えていってもらえた人が、そうじゃと思っとるもんで、研修に行って、基本なことを話しとります。

林業を始める人にいうと、忍耐力がなけなできんということですね。長い年月が、かかるもんで。若い人に望むことは、自分の家に山があったんなら、少しでも林業に関心持って、木を植え、ええ木をつくるってこと。うちの父親は、山を手入れすることは山へ貯金せることじゃと言っとったんです。木をちゃんと植えとけば、あんばよう育って、今度切ったときに利益が入ってくるで。そういうつもりで自分の山のある人は、一日でも1時間でも手入れをしてってもらいたいと、僕は一番思います。自然に預けたものは絶対返ってくるんです。

名人 和田 光雄さんのプロフィール

●生年月日：昭和11年7月9日生まれ
●職業：林業

12歳から父親に習って林業を始める。この道60年を越える林業の専門家。昭和48年に師匠でもあった父親が亡くなり（当時37歳）、一人で自分の山で林業を始める。カーツカッターによる枝打ちは郡上市でも、最も熟練した技術があり平成22年2月には、父親も昭和36年に受賞した「林野庁長官賞」を第55回中日造林賞優良造林地の部で受賞。優良な苗木の育成も認められている。また森林組合へ指導を行うなど、林業の発展、若手育成に努めている。趣味は将棋、スキーは1級の腕前。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
公益社団法人
岐阜県緑化推進委員会　専務理事　臼井征雄】